



カラスの言い分 人間の言い分

校長 渡邊 圭三

先日は学校公開にお越しいただき、ありがとうございます。人数や時間を制限しての公開となりましたが、保護者の皆様に直接子供たちの授業の様子をご覧いただくことができました。感染拡大防止に努めながら、今後もこのような機会を設定してまいりたいと思います。

以前勤務していた学校でのこと。朝、私が校門に立つと、高い建物や電信柱の上に、普段見かけないおびただしい数のカラスがとまっているのを目にしました。地域の大きな公園にある樹木が伐採され、彼らのねぐらをなくしているのが原因でした。また、別のある日の朝、学校のフェンスにとまって、何か一点を見つめているカラスがいました。校内にあるザクロの実が真っ赤に熟し、彼にとってはまたとないごちそうに見えたのでしょう。

二例ともすぐに教職員を通学路に立たせて児童看護し、直接害が及ぶことはありませんでした。カラスは人間にとってみれば生活を脅かしかねない厄介者というイメージがありますが、彼らにしてみれば、人間社会は自分たちが生きていくのに必須な「ねぐら」「食べ物」がたやすく手に入る良い環境なのでしょう。

『カラスのいいぶん 人と生きることをえらんだ鳥』で著者・嶋田泰子さんは、自宅周辺で見かけるカラスの日常の出来事や生態を紹介し、エピローグで次のように述べています。

私は、この数字(渡邊注・東京都が実施してきた駆除により減少したカラスの数)を見たら胸が痛くなりました。もしかしたら、わが家の庭に来ていたクロスケたちも退治された数に入っていたかもしれないと思ったからです。捕まえて殺す以外に方法はなかったのかなあと思いました。帰る森がなかったハシブトガラスは、都会を追われたら、どこで生きていけばいいのでしょうか。私たちがごみ出しの時間を守り、ごみにネットをかけるなど、ごみの出し方を工夫するだけでも、ずいぶん効果があるでしょう。食べ物を与えない、そうした方法でゆっくり数が減るのを待つことはできなかったのでしょうか？

もう一つ、私には気がかりなことがあります。都会でできあがった生態系に人間が突然割り込んで、1種だけを大量に退治することで、生き物たちのバランスがくずれないのかなあとということです。

著者は、自身がハシブトガラスのファンになってしまったから不公平に感じるのかもしれないと続けつつ、共に生きる道を模索する提言で結んでいます。

一年前、私が着任した時、両国の町には「ユリカモメ」はいてもカラスはいないので、と書いていましたが、いえいえ、そのようなことはなく、すぐに両国公園上空を飛び回っている個体を見つけました。おそらく鳥それぞれのテリトリーがあり、上手に棲み分けをしているのでしょう。カラスたちは今まさにヒナの巣立ちを迎え警戒心が増し、人間と最も対立する季節。カラスの言い分、人間の言い分…。どちらも生かされて共存できる社会がいつか実現されるといいですね。

